砂漠に消えた「革命」
——近代エジプトの遊牧民「革命」——

加藤　博*

キーワード　近代エジプト，歴史研究と伝承文，農民中心史観，「革命」物語

I．はじめに　「反乱」あるいは「革命」
1．エジプト人にとっての「革命」(thawra)
2．忘れられた「革命」
II．無視された「革命」
1．エジプトはナイルの賜物
2．オマル・マスリー「革命」との出会い
3．近代エジプト遊牧民研究事情
4．歴史研究と伝承文学
5．「革命」研究の資料状況
6．根強い農民中心史観
III．物語られる「革命」
1．「革命」物語との出会い
2．翻訳「オマル・マスリーとマグリブ帽」
IV．「おわりに」に代えて
1．「革命」物語はどのように作成されたのか
2．「事実としての革命」と「物語としての革命」

I．はじめに　「反乱」あるいは「革命」

> われわれは盗賊ではなかった。われわれは悪漢ではなかった。われわれは抑圧者ではなかった。……われわれは，いかなる環境，時，状況にあっても，エジプトに仕え，エジプトを高め，エジプトの玉座の柱を支える鋭い刃であり，正義の槍であった。
> (ジャマーティー「オマル・マスリーとマグリブ帽」から)*1

1．エジプト人にとっての「革命」(thawra)

アラビア語のサウラ（thawra）という単語は，thāra「蜂起する」という動詞から派生した名詞である。「蜂起すること」を意味する。もっとも，中世のアラビア語文献では，動詞 thāra，またそれから派生した能動分詞 thā'ir「蜂起する者」は多く使用されているものの，thawra という単語はほとんど使われていない。

つまり，サウラは近代以降，使用されるようになった単語である。それもそのはずで，この単語は，1789年のフランス「革命」の翻訳語としてアラビア語に導入され，その後，同革命と同種の政治運動を指す言葉として使われてきたのである。かくして，この言葉には，レボルーションに対応する「革命」という訳語があてられてきた。*2

しかし，すべての翻訳語は，原語の文化環境から引き離され，別の文化環境に植えつけ

＊　一橋大学経済学部教授
＊1　Ḥabīb Jāmātī, "'umar al-maṣrī wa al-ṭarbūsh al-maghribī", in 'Abd al-Salām Ḥamd al-Ḥubūnī, *ansāb qabā'il al-'arab*, Cairo, 1966, p. 129.

られたとき，否応なく意味の変容を受ける。とりわけ，政治用語はそうである。サウラという言葉もその例外ではない。

たとえば，ドイツの近代アラブ史家，シュルシュは，近代エジプト最初の民族運動である1881-82年のアフマド・オラービーを指導者とした運動を扱った著作『エジプト人のためのエジプト』のアラビア語版への序文のなかで，「民族主義」(qawmīya) とならんで「革命」(thawra) という基本用語の意味と適用法がエジプトとドイツでは異なっていることに注意を喚起している。

ドイツにおいて「革命」は，国家における政治，社会，経済体制全体の基本的かつ不可逆的変革を意味するのに対して，エジプトではこうした厳密さを欠いたより広範な政治運動を指す用語として使われているというのである。*3

シュルシュが，「革命」という言葉のエジプトの政治文化環境のなかでの意味の変容を指摘する際，この言葉とならんで，「民族主義」を同じく意味の変容を受けた言葉として挙げたのは，的を射ている。というのも，「革命」という言葉のエジプト特有の意味と用語法をもたらしたのは，近代以降，エジプトにおいて植民地解放，独立闘争という形で展開された「民族主義」運動の経験だからである。

つまり，サウラという言葉は，近代アラブ世界において展開した民族主義運動を背景として形成された民族主義史観と深く結びついているのである。ここで民族主義史観とは，自国の近現代史を自民族による国民国家形成の過程とみる歴史観のことである。エジプトの場合，それは1952年のエジプト革命以降，「民族主義」運動の主体を民衆におく情緒的な民衆史観の強い影響を受けることになる。

2. 忘れられた「革命」

さて，本稿は近代エジプトにおけるこうした「革命」の一つをテーマとする。19世紀中葉におけるオマル・マスリーを指導者とした遊牧民「革命」である。もっとも，この「革命」は公文書のなかでは「反乱」と呼ばれている。また，現在のエジプトでこの「革命」を知るのは，ほんの一握りの人間でしかない。つまり，忘れられた「革命」である。

しかし，それが「反乱」として蔑まれようと，あるいは無視されようと，その精神を大事に語り継いでいこうとしている人間にとって，それは「革命」として存在している。そのような人間にとっては，その事件を「反乱」と呼ぶか「革命」と呼ぶかは，ただ単なる言葉の選択ではない。

研究者もまた，この言葉の選択に無関心ではおれない。それは，一世代前の研究者が，アフマド・オラービーを指導者とした運動を論じる際に直面したのと同じ問題である。その時，彼らは，近代エジプト史に対するスタンスを，この運動を「反乱」と呼ぶか「革命」と呼ぶかの，言葉の選択として問われたのである。*4 シュルシュが，この運動をテーマとした先の著作のなかで，言い訳のようにも聞こえる「革命」の解説を述べたとき，彼

＊2　B. Lewis, "Islamic Concepts of Revolution", in P. J. Vatikiotis ed., *Revolution in the Middle East and Other Case Studies,* London, 1972, pp. 38-39.

＊3　A. Schölch, *miṣr li-l-miṣriyīn. azmat miṣr al-ijtimā'īya wa al-siyāsīya 1878-1882,* Cairo, 1983, pp. 5-6.

はこの問題に，自分なりの回答を与えたのである。

さて，私は，本稿で扱われる事件を「革命」と呼んでいる。それも，当初は「反乱」と呼んでいたものを，研究の過程で「革命」と呼びかえたのである。なぜか。それは，私がこの忘れられた「革命」を追う過程で一人の人物に出会い，その彼がこの事件を「革命」と呼んだからである。この人物とは，マスリー・キーラーニー，事件の指導者オマル・マスリーの曾孫である。

私は，彼を知る前に，この事件に関して英文の論文を書いていた。*5 マスリー・キーラーニーはたまたまそれを読み，わざわざその感想を日本に送ってよこしてくれた。そのなかに，次のような文章があった。

> われわれの間に意見の相違を認めません。あなたがこの「革命」を「反乱」と呼ぶことを除いては。(1993年5月2日付，私宛書簡)

マスリー・キーラーニーは若い頃，「反乱」と呼ばれてきた曾祖父を指導者とする事件の復権に執念を燃やしていた。いくつかのエッセイを書き，新聞や雑誌に投稿したが，「遊牧民に対する偏見もあって」取り上げられなかったという。

その性格は誠実であり，自分が「革命」という言葉を，正確な社会科学的な意味で使っていないことも十分に自覚していた。「革命を社会科学的な意味で使うとするならば，1952年のナセルによる政権奪取も革命ではなく，クーデターだろう」と至極まっとうな指摘もする。その後の交際のなかで，インフォーマントとなってくれ，自分がもつ情報を私に出し惜しみすることなく与えてくれた。その彼がこの事件を「革命」と呼んでいるのである。

彼はこの事件を大切に語り継ごうとしている人物である。そして，私はといえば，彼が披瀝する見識の誠実さに疑いをもつことはできなかった。であるならば，この事件が政府の公文書，学者の研究書において「反乱」と呼ばれようとも，またそれに対抗して，この事件を「革命」と呼ぶことを主張する人間がたとえこの世で彼一人であるとしても，私がこの彼の事件観に賛同するかぎり，彼にならって，この事件を「革命」と呼ぶことに何の問題があろうか。

本稿は，この歴史的に忘れられた「革命」を近代エジプト史のなかに位置づけるため，次の2つの準備作業をすることを目的とする。第1は，この「革命」がなぜ忘れられたのかを，研究事情，資料状況のなかに探ることである。そして，第2は，一握りの人々の間にではあるものの，現在にまで語り継がれてきた一つの「革命」物語を紹介することである。

II. 無視された「革命」

> アッバースとサイードの治世での農民の反乱に関する情報は多くない。しかし，アッバースの死からサイードの即位までの期間に，ギーザ地方の多くの村で反乱があったことは間違いない。サイードの即位の直後

＊4　加藤博「エジプト近代史研究動向——オラービー運動研究を題材として——」『オリエント』第27巻2号，1985年。

＊5　Hiroshi Kato, "Nomads and Farmers in the Process of the Modernization of Egypt", *Orient*, Vol. XXVI, 1990.

に公布された刑法のなかにも，農民の反乱あるいは不穏に対する罰則を定めた特別の条文を見出すことができる。……興味深いことは，この法律のなかでは，反乱の可能性がある社会集団として（農民が述べられるだけで），その他の社会集団は言及されていない，ということである。

（ベアー「農民の服従と反乱」から）*6

1. エジプトはナイルの賜物

私がエジプトを研究対象と定め，研究を始めた時，私のエジプト観はほぼ次のようなものであった。

「エジプトはナイルの賜物」。これは，誰もが知るギリシアの歴史家ヘロドトスの有名な言葉である。この言葉に象徴されるように，エジプトは古来，ナイルの水を利用した豊かな農業文明を育んできた。地中海周辺に相次いで勃興した強大な政治勢力はすべて，その農業資源の豊かさに引かれ，エジプトの征服，支配を企てた。しかし，時間とともに，どの政治勢力も「エジプト化」された。

ナイルはすべてを飲み込む胃袋であった。権力者たちは，エジプトの富を最大限に搾取するため，中央集権的な支配機構を張りめぐらせた。しかし，エジプトを舞台に展開した歴史絵巻の主人公は，こうしたうつろい行く権力者たちではなく，エジプト文明を育んだナイルであり，その水に生活のすべてをかけ，黙々と働く農民たちであった。

そのため，1982年から84年にかけてカイロに滞在し，エジプト国立文書館で未刊行文書の閲覧・収集にあたる過程で，近代エジプトにおける遊牧民問題の重要性に気づいたとき，私の驚きは大きかった。

当時，私は，刊行史料に基づく近代エジプト農村研究に限界を感じ，この限界を，未刊行文書の渉猟でもって克服しようとしていた。とりわけ，「エジプト総督内閣官房トルコ語局文書」として知られている文書群に注目し，そのうち，サイード治世からイスマイール治世の初めにあたる，1853年から65年までの12年の間に作成された文書を集中的に閲覧していた。

時代を19世紀中葉に定めたのは，直接的には，この時代に，エジプト農村社会に決定的な影響を与え，変容をもたらした一連の土地立法が公布されたからであった。私のそれまでの近代エジプト農村研究は，主として，この一連の土地立法に基づいていた。*7

とはいえ，19世紀中葉に注目したのは，それだけではなかった。ムハンマド・アリー（在位1805-48年）とイスマイール（在位1864-79年）の２つの華やかな時代に挟まれ，従来の研究において，いわば「忘れられた時代」であるこの19世紀中葉のサイードの時代こそ，ムハンマド・アリーの保護貿易主義的経済独占政策からイスマイールの自由主義的経済開放政策への転換期として，近現代エジプト史を理解する鍵であると判断していたのである。

また，「エジプト総督内閣官房トルコ語局

＊6　G. Baer, "Submissiveness and Revolt of the Fellah", in *Studies in the Social History of Modern Egypt*, The University of Chicago Press, 1969, p. 99.

＊7　当時の研究を中心に編まれたのが以下の文献である。加藤博『私的土地所有権とエジプト社会』創文社，1993年。

文書」に集中して目を通したのは，これが中央権力と地方行政官との間で取り交わされた文書群であるため，そこで扱われているテーマを追うことによって，時の中央権力がどのような政策・事件を緊急に検討を要する重要事項として考えていたかを知ることができるとともに，こうした重要政策・事件を地方行政官の作成した報告書を中心に，地方レベルの情報でもって分析できるからであった。*8

2. オマル・マスリー「革命」との出会い

当初，私はこの文書群を，刊行史料に依拠したそれまでの私の農村研究のなかで導き出されたいくつかの仮説を実証するために利用しようと考えた。そこで，農村・農民関係の重要なキー・ワードを手掛かりにして文書を時代順に読み飛ばし始めた。ところが，その途中で，私の念頭になかった社会不穏，遊牧民などの言葉がたびたび目についた。

どうもおかしい。サイードの時代は確か，前後の時代に比べて社会不安の少ない穏やかな時代であるとされていたはずである。それにしては治安関係の文書が多い。さらに，それらのほとんどが遊牧民に関係する。これはいけない，と思った。そこで，すでに読み飛ばした文書を，今度は遊牧民をキー・ワードにして読み直し，さらに，その後は農村・農民のほか遊牧民をもキー・ワードとして文書を読み進めていった。

その結果，なんと前後の時代に比べて社会不安の少ない穏やかな時代であるとされてきたサイードの時代が遊牧民の不穏，反乱に悩まされた時代であった，ということを知ったのである。そして，当時における最大の事件が，サイードの治世の10年間にわたってエジプト政府を悩ませた，オマル・マスリーの「革命」であったのである。私の驚きは大変なものであった。

実際，当時，実に多くの遊牧民の騒乱が文書によって確認できるが，そのうち，事例研究を許すほどに情報を集めることができる騒乱として，オマル・マスリー「革命」のほか，1855年のシャルキーヤ県カフル・イヤード村に対するホワィータート部族の襲撃*9，1858年のカリュービーヤ県シュブランジュ村に対するソォフビー部族の襲撃*10などがある。

そのうち，カフル・イヤード村に対する襲撃の場合，この村が砂漠地方との境界にあるシャルキーヤ県にあり，そこでは遊牧民の活動が活発であるため，このような騒動が起きるのは不思議でない。しかし，シュブランジュ村に対する襲撃の場合，この村は中央権力のお膝元のカイロから近いカリュービーヤ県にあり，このような首都近郊においても遊牧民の騒乱がみられたのである。

そして，オマル・マスリー「革命」といえば，それはミニヤ，ファイユーム県の中エジプト地方を中心に，上エジプトのアシュート県や，バハリア，ダハラ，ハルガ・オアシスのエジプト西部砂漠地方をも巻き込んだ広域騒乱であった。こうして，この3つの騒乱だけを取り上げるだけでも，サイードの治世において，遊牧民による騒乱がほぼエジプト全土に展開したことが理解できるであろう。

＊8 「エジプト総督内閣官房トルコ語局文書」(*maḥāfiẓ ma'īya sanīya turkī*) については，加藤博『私的土地所有権とエジプト社会』xix-xxページを参照のこと。

＊9 *maḥāfiẓ ma'īya sanīya turkī, maḥfaẓa raqm 8, wathīqa raqm 52, 302.*

＊10 *maḥāfiẓ ma'īya sanīya turkī, maḥfaẓa raqm 22, w a thī qa raqm 298, 344. maḥāfiẓ ma'īya sanīya turkī, maḥfaẓa raqm 23, w a thī qa raqm 87.*

3. 近代エジプト遊牧民研究事情

そこで，それまで全くと言っていいほど関心のなかった遊牧民に関する文献を，注意して集め始めた。

その結果，ただちに，オマル・マスリーの「革命」は言うに及ばず，それがエジプト人研究者によるものであれ，外国人研究者によるものであれ，遊牧民を直接に研究テーマとした歴史研究書が驚くほど少ないことに気づいた。この事実は，前近代イスラム史研究において，社会生活，とりわけ政治における遊牧民の役割が強調されてきているのとは誠に対照的である。

私が確認し得た限りにおいて，オマル・マスリーに言及した歴史研究書は，アリー・バラカートの『エジプトにおける農地所有権の発展，1813-1914年』*11とアリー・シャラビーの『19世紀後半におけるエジプト農村』*12と同著者の『19世紀におけるエジプト人と徴兵』*13である。そこには，オマル・マスリーの名前がそれぞれ6回，5回，そして1回言及されている。そのうち，それぞれ4回，3回，1回は，「反乱」(tamarrud) の記述をともなっての言及である。もちろん，それらの言及のなかに細かな「反乱」の解説を期待するのは望むべくもない。

そもそも，遊牧民の「反乱」に社会史的な意義を見いだそうとの姿勢は，これまでの近代エジプト史家にはみられなかった。近年になってやっとこの傾向が改善され，遊牧民の「反乱」が，一方ではオラービー「革命」を中心としたエジプト民族主義運動とのかかわりから評価されるようになり*14，他方では，「匪族」研究のなかで「原初的反抗」の一形態として議論されることになった。*15

しかし，それまでは，遊牧民といえば，近代の時間の経過とともに，「エジプト社会」に同化していく存在に過ぎなかった。そのため，遊牧民研究は数が少ないことはもちろんのこと，そのほとんどが，19世紀において試みられた遊牧民の定住政策と，その過程で遊牧民の部族長が地主範疇の一つとなる，19世紀後半に顕在化した大土地所有制とに関連したものであった。オマル・マスリー「革命」に言及した文献として先に指摘した3つの著作のうちの前二者はその代表的なものである。

それでは，どうしてこのような研究事情が生じたのであろうか。その何よりの理由は，明らかに資料状況であろう。この点において，まず指摘すべきは残された記述資料の少なさである。実際，遊牧民に関する資料は，大きな反乱が起きた時のような非日常的時期に資料が限られるとはいえ，ないわけではない。しかし，その量は都市民や農民に比して圧倒的に少ない。つまり，都市民や農民の場合，その国家権力との近さから，比較的多くの記述資料が残されているが，遊牧民の場合，その国家権力との遠さ，口承を重視した文化伝統から，彼らの歴史のほとんどは「伝承」の世界で語られてきたのである。これは，歴史

*11 'Alī Barākat, *taṭawwur al-milkīya al-zirā'īya fī miṣr 1813-1914 wa athar-hu 'alā al-ḥaraka al-siyāsīya,* Cairo, 1977.
*12 'Alī Shalabī, *al-rīf al-miṣrī fī al-niṣf al-thānī min al-qarn al-tāsi' 'ashar 1847-1891,* Cairo, 1983.
*13 'Alī Shalabī, *al-miṣriyūn wa al-jundīya fī al-qarn al-tāsi' 'ashar,* Cairo, 1988.
*14 A. Schölch, "The Egyptian Bedouins and the 'Urabiyun (1882)", *Die Welt des Islams,* XVII, 1-4, 19. 'Abd allāh M. 'Azbāwī, *al-badw wa dawr-hum fī al-thawra al-'urābīya,* Cairo, 1986.
*15 Nathan Brown, "Brigands and State Building: The Invention of Banditry in Modern Egypt", *Comparative Studies in Society and History,* Vol. 32 No. 2, 1990.

研究では致命的な資料上の限界である。

また，遊牧民研究については，彼らの行動半径の広さから，資料を広域に求めねばならないということがある。実際，農民の場合，その生活，意識空間は，村落，地方社会，せいぜい国民国家の枠内にとどまっていることが多いが，遊牧民の場合，それらは国民国家の枠をはるかに越えて展開している。

オマル・マスリー「革命」の場合でも，オマル・マスリーおよびその一族は，エジプトに居住するも，彼らの帰属意識はリビアのキレナイカ地方にあり，また彼らの行動範囲は，エジプトを越えてリビア，スーダンを始めとしたアラブ世界各地に及んでいる。さらに，彼らの歴史は，遊牧部族内，遊牧部族間の対立を縦糸に，エジプト，リビアの国家権力，さらには当時アラブ世界に勢力を拡張しようとした欧米列強との関係を横糸に編まれるという，錯綜し，波瀾万丈の絵巻物のごとくである。*16

こうして，遊牧民研究のためには，「伝承」を含む，伝統的な歴史学がこれまで射程に入れてこなかった，さまざまな性格の，そして広領域にわたる資料に依拠することを必要とする。しかし，このような資料の収集と解釈は，記述資料を重視し，一国史研究を主流としてきた従来の歴史研究の最も不得意とするところであろう。少なくとも，エジプト近代史の研究領域においては，これら資料上の困難を克服しえていない。

4. 歴史研究と伝承文学

この点を，伝承文学についてみてみよう。ここで，伝承文学とは，遊牧部族の系図のほか，家系に関連して語り継がれてきた伝聞の総体を意味する。その残され方の形態はさまざまである。

たとえば，系図は，本としてまとめられたもののほか，一枚の紙にタイプされたもの，ワクフ文書の冒頭に記載されたもの，自らが手書きで作ったもの，さらに記憶として頭にしか残されていないものなどがある。また，伝聞についても，活字化されて残っているものと，詩歌に代表されるような，口承でのみ伝えられているものがある。そのすべてを，ここでは伝承文学と呼んでおく。

ところで，当然のことながら，近代エジプトの遊牧民についても伝承文学はある。多いとはいえないものの，その一部は本として活字化されてもいる。*17

しかし，歴史家は，この種の情報を歴史研究のための資料として認めたがらない。実際のところ，これまで近代エジプトの遊牧民に言及した研究者が，これらの伝承文学を参照し，歴史資料として分析の対象にしたことは稀にしかない。この歴史研究資料としての伝承文学に対する軽視は，とりわけエジプト人研究者に顕著である。

彼らは，伝承を収集するためにみずから聞き取り調査に従事することがないのはもちろんのこと，たとえ伝承文学を資料として採用することがあったとしても，それは，たとえ

---

*16 ジャワーズィー部族については，とりあえず Ṭāhā Muḥammad Kīlānī, *qabīla al-jawāzī fī mawkib al-tārīkh*, al-Minyā, 1994，加藤博「近代エジプトの遊牧民――「オマル・マスリーの反乱」聞き取り調査ノート――」『一橋論叢』第110巻第4号，1993年を参照のこと。前者は，ジャワーズィー部族の一人が自分の部族の歴史をまとめ，自費出版したものである。また，ジャワーズィー部族の近代における歴史については，先に紹介したオマル・マスリーの曾孫，マスリー・キーラーニーの未刊行論文「オマル・マスリー革命」(al-Maṣrī Kīlānī al-Maṣrī, "thawra 'umar al-maṣrī") が興味深い文献である。彼のオマル・マスリー研究については，別の機会に詳しく紹介したい。

ばアフマド・ルトフィ・サイイドのようなアカデミシャンがこれらを収集し，引用した文献，辞典の関係箇所を孫引きするときだけである。*18 そのため，こうした数少ないアカデミシャンの著作にみられる，部族名，部族の家系など近代エジプト遊牧民に関する情報が限りなく再生産される結果となっている。*19

この点，対照的なのが，文化人類学者マリの研究である。彼はその著作『イシュマエルの息子たち』のなかで，エジプトにおける遊牧部族の分布，移住，国家との関係，部族間の合従連衡を描きだしている。そのなかに，次のようなオマル・マスリー「革命」への言及もみられる。*20

サイード・パシャが遊牧民を彼の軍隊に徴用しようとした時，ジャワーズィー族の首領（ウムダ），オマル・ベイ・マスリーは，キレナイカ地方における彼らの先祖の地に再移住することを目的とした遠征を引率した。しかし，彼はわずかに200余名の男たちを集め得たにすぎなかった。そのうち，70名が彼自身の部族からであり，残りはアマーイム，タルフーナ，ジャハマのベルベル部族からであった。ダハラ・オアシスのバラートにおいて，彼らを追うために派遣されたほかの〔部族の〕遊牧民の一群とわたりあった後，彼らはトリポリ行政区（ヴィラーヤト）の境界を越えることに成功した。しかし，トルコ政府は，これ以上の負担を嫌って，サイード・パシャと交渉し，今後とも彼らが軍事奉仕から免除されるよう取り計らった。その結果，彼らは〔エジプトに〕戻り，ファイユームの近隣に住み着いた。オマル・ベイ・マスリーは，イスマイール・パシャが彼を許し，彼が上エジプトの彼の所領に戻ることを認める時まで，トリポリに残った。

その叙述が系図にそって整理されていることが示すように，マリは主として伝承というジャンルに依拠して研究を進めた。その結果，そこには，次のようなオマル・マスリーに関する生き生きとした言い伝えが収録されることになった。*21

彼は豪胆ではあったが，背丈の低い男であった。彼について次のようなことが伝えられている。かつて，彼があるテントのなかで横になって寝ていた時，一人の女がもう一人の女に，彼は誰か，と尋ねた。それがオマル・ベイ・マスリーであることを聞いたその女は，テントのなかにもぐりこみ，彼女の手で彼の背丈を測りはじめた。彼女の手が彼の心臓に達した時，彼は目を覚まし，叫んだ。「女よ，やめなさい！　あなたは男のサイズとは彼の心臓のサイズであるということを知らないのか？」

マリの著作では，オマル・マスリーは，遊

＊17　＊1で挙げた文献は，こうした伝承文学の一つである。
＊18　Aḥmad Luṭfī al-Sayyid, *qabā'il al-'arab bi-miṣr,* Cairo, 1936.
＊19　たとえば，＊18で挙げたアフマド・ルトフィ・サイイドの著作から引用された，全く同じジャワーズィー部族についての記述が，次の2つの文献にみられる。'Abd allāh M. 'Azbāwī, *al-badw wa dawr-hum fī al-thawra al-'urābīya,* p. 13. Laylā 'Abd al-Laṭīf, *siyāsa muḥammad 'alī izā'a al-'urbān fī miṣr,* Cairo, 1986, p. 15.
＊20　George W. Murray, *Sons of Ishmael : A Study of the Egyptian Bedouins,* New York, 1935, p. 289.
＊21　*ibid.*, pp. 289-290.

牧民への徴兵制の適用を嫌い，故郷のリビア，キレナイカ地方への再移住を試みた部族長（ウムダ）として描かれている。しかし，そこには，ある種の騒乱は示唆されているものの，「革命」はもちろんのこと，「反乱」という言葉さえ使われていない。

そこに反映されているのは，歴史家と文化人類学者との間にみられる問題設定，問題関心の違いである。つまり，同じくオマル・マスリーの行動に言及しつつも，分析方法，とりわけ依拠する資料の性格の違いから，歴史家はその「公的」側面に，文化人類学者はその「私的」側面に傾斜した叙述を行ってきたのである。しかし，このような学問の棲み分けが時代遅れになって久しいことは指摘すべくもない。

5.「革命」研究の資料状況

こうして，歴史家による近代エジプト遊牧民研究が少ない理由の多くが，記述資料のみを歴史資料とする彼らの古典的資料観によることは間違いないとしても，理由はそれだけではない。というのも，ここでは伝承文学を除き，その他の刊行資料に話を限ってさえも，近代エジプト遊牧民関係の資料がないわけではないからである。それは，本稿のテーマであるオマル・マスリー「革命」についてでさえいえる。

たしかに，エジプト全土を対象とした著名な年代記のなかでは，この「革命」は全く言及されていないといっても間違いない。私が現在までに確認できる限り，この「革命」への言及はイスマイール・サルハンクの『海洋諸国事情』にだけみられるからである。それを引用すれば，次のようになる。*22

〈ファイユームにおける遊牧民蜂起（thawrat al-'urbān）〉 イスラム暦1270年（西暦1854年），遊牧民が，遊牧民の首領（shaykh）オマル・マスリーを指導者として，ファイユーム各地で蜂起した（thāra）。サイード・パシャは，3個師団からなる軍隊を彼らに差し向けた。第1師団は，アブー・スバーウ〔「指のない男」の意〕として知られたフサイン・パシャ，第2師団は将軍イスマイール・パシャの指揮下にあった。第3師団はサイード・パシャ自身が指揮をとった。ブヘイラ〔県〕の遊牧民であるアウラード・アリー部族が政府〔軍〕に加わった。この遠征軍は2つの大砲を所持していた。遊牧民は〔攻撃を〕防ぎきれず，数日後，彼らの団結は崩れさった。平和が戻った。多くの遊牧民の首長が捕らえられ，アレクサンドリア港の兵器廠に投獄された。この〔蜂起の〕原因は，サイード・パシャがほかの住民と同様に，遊牧民の子供たちをエジプト軍に編入しようと望んだことであった。ところが，彼らはそれを，それまで享受してきた，そしてエジプトを支配するすべての国家が認めていた古い特権を根拠に，またほかの住民のように農地を保有していない，等々〔の事実〕を楯に，決して受け入れようとはしなかった。この特権は現在も存在している。

目をオマル・マスリー「革命」に深く関係した地方の地誌関係文献に転じるならば，1894年に刊行されたイブラヒーム・ラムズィ

---

*22 Ismā'īl Sarhank, *ḥaqā'iq al-akhbār 'an duwal al-biḥār*, vol. 2 , Būlāq, 1314 A. H., p. 267.

ー『ファイユーム史』に，次のような記述がある。*23

〈遊牧民事件〉 イスラム暦1270年（西暦1854年），故サイード・パシャが〔エジプト総督に〕就いた。遊牧民が人々をいたく苦しめた。そこで，イスラム暦1271年になって，サイード・パシャは彼らによる災難を絶つため，遊牧民から武器をとりあげ，彼らを軍役に就かせるよう命じた。ミニヤ県の遊牧民は政府の命令を拒絶し，税の支払いをやめた。遊牧民による災難は増し，政府の官吏に抵抗し，蜂起する（thāra）までになった。ミニヤ県での遊牧民の蜂起（thawra）の指導者（za'īm）は，ファワーイド族の首領（'umda）オマル・マスリーであった。遊牧民の反乱（'iṣyān）は長引き，ついに政府は彼らの指導者たちの逮捕を命じた。かくて，ラムルーム・ベク・サアディーの父親であるサアディーと，アブドゥルナビー・キーシャールが逮捕された。この二人は兄弟であり，ともにファイユーム県で絞首された。また，多くの彼らの仲間たち（a'wān）が，現在ではカルハーナ〔村〕として知られているカールハーナト・ニーラ村において銃殺された。その後，ファイユームの遊牧民は，サミーダ・ジバーリーの指揮のもと，西部へ移住するために集まった。彼は集まった遊牧民に対して，次のような内容の演説を行った。「われわれはまだエジプトに戻ることを望んでいる。われわれにとって，エジプトは不可欠だ。いかなるところでも，強奪，破壊，そして安寧を破ること〔はしないよう〕気をつけよ。われわれは政府を恐れてエジプトを離れるのだ。エジプトで攻撃を仕掛けないよう。将来，エジプトがわれわれを嫌うことがあってはならないからである。かくして，諸部族がカールーン湖の岸に集合した。そして，そこから，オアシスを経由して西部に移住した。しかし，しばらくして，彼らは戻った。政府がその後の彼らの〔身分を〕保証し，彼らを許したからである。

私自身は残念ながら，これ以外の「革命」に言及した地誌をみつけだせないでいる。しかし，残された地誌を収集し，丹念に探索するならば，必ずやオマル・マスリーあるいは「革命」に関する情報を含む地誌があるに違いない。

しかし，資料状況をもって「革命」研究の不在の理由となしえないのは，アミーン・サーミー『ナイル年鑑』の存在である。これは，歴史家が好む国家が公布・通達した公文書集だからである。そのサイード，イスマイール期を扱った巻のなかには，43点の遊牧民関係文書が収められている。そのうちの5点には，オマル・マスリーの名前がみえる。*24 実際，先に指摘した（115頁）二人の研究者のうちの一人，アリー・シャラビーは，この文献の参照によってオマル・マスリーに言及している。

また，話を未刊行の資料とすると，すでに指摘したように，エジプト国立文書館に所蔵されている「革命」関係文書の数は多い。その数の多さのために，遊牧民に興味をもって

*23 Ibrāhīm Ramzī, *tārīkh al-fayyūm*, Fayyūm, 1894, p. 43-44. 指摘すべくもないながら，この記述のなかのオマル・マスリーはファワーイド族の首領であるとの指摘は誤りである。

いなかった私のような者でも，「革命」の重要さに気づき，そこから近代エジプト史の見直しに取りかかったほどである。

6. 根強い農民中心史観

したがって，近代エジプト史研究において，「革命」についてはもちろんのこと，遊牧民一般に対して全くといっていいほど注意が払われてこなかった理由は，資料上の制約を越えた，研究者の問題関心，そして，こうした問題関心の枠組みとなっている学界動向，イデオロギー事情にある。

それを一言で述べれば，「国民国家」エジプトの枠組みを前提とした一国史観，およびそれに付随した農民中心史観である。それは，具体的には，外国人研究者の場合，近代化論史観の形をとり，エジプト人研究者の場合，民族主義史観の形をとる。

近代化論史観とは，「伝統」と「近代」を二項対立的に捉え，近現代エジプト史を「伝統的」社会から「近代的」社会への移行として説明しようとする歴史観である。これに対して，民族主義史観とは，近現代エジプト史をエジプト「民族」による「国民国家」エジプトの建設過程と捉える歴史観である。

エジプトにおける民族主義史観は，1881-82年のオラービー革命以降のエジプト民族主義運動の高まりのなか，国家主導の王朝史観に対抗するイデオロギーとして形成された。現在，エジプト人研究者の間で前提されている民族主義史観は，1952年のエジプト革命後のナセル政治体制下，とりわけ60年代におけるその左傾化のなかで確立されたものであり，1952年のエジプト革命を「国民国家」エジプトの完成と位置づけ，近現代エジプト史をこのゴールへ至るエジプト「民族」の運動として捉える。

この２つの歴史観は，一見すると社会階級・階層分析において鋭く対立しているかにみえる。それは，社会の近代化の担い手と民族運動の主体とは必ずしも一致せず，対立関係にあることの方が多いからである。しかし，その実，すでに別のところで指摘したように*25，この２つは，基本的な思考枠組みにおいて，階級・階層構造の重層性に対する軽視という点で共通している。

つまり，近代化論史観にあって，さまざまな「歴史的」「伝統的」な人間集団が「前近代的」で「遅れた」存在として切り捨てられる傾向があるのと同様に，民族主義史観にあっても，「前近代的」「伝統的」な生業，生活パターンをもつさまざまな人間集団は民族運動の主体となりえないという理由から軽視されてきた。

そして，この２つの歴史観にあって，ともに農民は歴史の主人公であった。圧倒的な農業立国のエジプトにおいて，農村の生活改善，農民の心性改革なしに社会の近代化はありえないし，農民の支持なくしては民族運動の成就はおぼつかないからである。これに対して，歴史の端役として切り捨てられ，軽視されてきた人間集団の典型が遊牧民であった。*26

---

*24 Amīn Sāmī, *taqwīm al-nīl wa 'aṣr 'abbās ḥilmī al-awwal wa muḥammad sa'īd bāshā*, vol. 3-1, *taqwīm al-nīl wa 'aṣr ismā'īl bāshā*, vol. 3-2, Cairo, 1936.

*25 加藤博「エジプトにおける社会経済変動と空間編成の変容――近代エジプト「定期市」研究序説――」伊能武次編『中東諸国における政治経済変動の諸相』アジア経済研究所，1993，76-77ページ。

III. 物語られる「革命」

鉄砲での戦いのあったバラートの日に思いを致せば，
その時，外国語を喋り，頭に何も被らぬサンジャクは長くすすり泣いていた，
苦しかったその日，すべての旗はイムトリード家のものであった，
彼らを除く，ジャハーマとアマーイムは武器を使わぬままに逃げ去った……

（「アギーラ氏の聞き取り調査」から）*27

1.「革命」物語との出会い

ところで，第二節の冒頭で指摘したように，エジプトを研究対象と定めてからオマル・マスリー「革命」に出会うまで，私もまた，この農民中心史観にどっぷりと漬かっていた。そのため，「革命」との出会いは，私がいかに農村・農民を重視する余り，偏った近代エジプト社会観を抱いていたかを気づかせることになった。

そこで，少しずつ遊牧民関係の資料を集めだしたのであったが，その過程で，アブドゥルサラーム・フブーニー『アラブ諸部族の系譜』（1966年）という伝承文学関係著作のなかで，ハビーブ・ジャマーティーの筆になる「オマル・マスリーとマグリブ帽」と題された一編をみつけた。*28 私は当初それを，遊牧民の間で伝わる伝承をそのまま記録したものと思った。ところが実際には，それは文字通りの伝承ではなく，一人の文学者による創作であった。そこで，以下，この一編を「革命」物語と呼ぶことにする。

また，この「革命」物語が最初に活字化されたのは，上記著作においてではなかった。それはまず，アラビア語月刊誌『ムサッワル』1321号（1950年2月3日刊行）に掲載された。「歴史に忘れられた歴史」と題された歴史物語の連載の一編として掲載されたもので，その後，ハビーブ・ジャマーティーの作品を集めたいくつかの著作においても採録された。

この「革命」物語については，まず何よりも，それが一つの文学作品としても面白いということが指摘されねばならない。ハビーブ・ジャマーティー（1896-1968年）は，熱烈なアラブ民族主義者のジャーナリストであった。*29 エジプトのシャルキーヤ県の地方都市ミニヤ・カムフで，シリア（レバノン）出身の医者を父に生まれた。父のレバノンへの移住に従い，そこのフランス系学校で教育を受ける。その後，エジプトに戻る。アラビア語は独学で習得した。

1916年，アラブ革命（al-thawra al-'arabīya al-kubrā）に参加し，アラブ民族主義運動にのめり込んでいく。1919年にエジプトでサアド・ザグルールを指導者とする1919年革命が発生すると，それに参加，革命青年団のリーダーの一人として活躍する。さらに1925年にシリアで対フランス独立運動が発生すると，

---

*26　近代エジプトにおける好対照な農民と遊牧民の境遇については，*5で挙げた文献，ならびに加藤博「国民軍の編成と遊牧民反乱――エジプト近代史における陰画としての遊牧民――」一橋大学地中海研究会編『地中海論集』XII, 1989年を参照のこと。

*27　1993年11月10日のインタビュー。アギーラ氏はオマル・マスリーの孫の一人。

*28　*1で挙げた文献。

*29　ハビーブ・ジャマーティーの死の直後，多くの新聞，雑誌に追悼文が載せられたが，ここで参照したのは，1968年7月26日発行の『ムサッワル』誌（*al-muṣawwar*）掲載の記事である。また，次の文献も参照した。Muṣṭafā Najīb ed., *mawsū'at a'lām miṣr fī al-qarn al-'ishrīn*, Cairo, 1996, p. 173.

それに参加，フランス当局から危険人物として，絞首刑の判決をうけ，エジプトに戻る。

こうした民族主義運動へ参加するなか，彼はジャーナリスト，作家としての生涯を送る。1918年，ジョルジュ・ザイダーンらとともにダール・ヒラール社の執筆陣に加わる。フランス語文芸雑誌『イマージュ』を主宰するほか，『ムサッワル』誌，『ヒラール』誌において健筆をふるう。彼の筆にかかるフランス語，アラビア語による政治評論，歴史小説，詩は多数にのぼる。

「オマル・マスリーとマグリブ帽」と題された短い物語は，こうしたハビーブ・ジャマーティーによる多数の作品の一つであった。この「革命」物語は，私の想像力をかきたて，その後の私の遊牧民研究に決定的な影響をおよぼした。それというのも，それがすぐれた文学作品であるということのほか，この「革命」物語がその一編として『ムサッワル』誌に掲載された連続物の題名，「歴史に忘れられた歴史」が端的に示すように，作家ハビーブ・ジャマーティーのオマル・マスリー「革命」をみる見方，遊牧民問題に対する関心が私のそれと一致したためである。

かくして，私は，この「革命」物語の内容に導かれて，近代エジプト遊牧民の境遇についての象徴論的分析を行い，それを邦文，英文の論文各一編にまとめた。*30 そのうちの英文の論文がマスリー・キーラーニーの目にとまり，先に指摘したように（112頁），われわれの交際が始まったのである。それというのも，1991年9月16日，私がミニヤ県にあるオマル・マスリーの館を訪問した際，自己紹介のつもりで，この論文を携帯し，帰る時にそこに置いてきたからであった。*31

ハビーブ・ジャマーティーの「革命」物語は，さまざまな意味合いにおいて，私の遊牧民研究の核心にある。少なくとも私には，そこにオマル・マスリー「革命」を近代エジプト史のなかで位置づける際に考慮しなければならない問題点が凝縮されて示されているように思われるからである。そこで，以下，その全文を翻訳してみよう。

2. 翻訳「オマル・マスリーとマグリブ帽」

読者はここで，一つの話のなかで，二つのエピソードに出会うことになる。つまり，マグリブ帽（al-ṭarbūsh al-maghribī）がどのようにエジプトにおける遊牧民革命（thawrat al-ʻurbān）の原因になったか（という話）と，サキーナ・バダウィーヤ（sakīnat al-badawīya）――文字通りには「ベドウィンのサキーナ」。以下，サキーナと略す――がどのように彼女の同胞たち（qawm）に対し伝来のアラブ慣習を守るよう説得したか（という話）である。

バクル・ミニヤーウィー（bakr al-minyāwī）――文字通りには「ミニヤ出身のバクル」。以下，バクルと略す――は，首都カイロを出立した後の最初の夜を，とある隊商宿（khān）ですごした。その隊商宿は，バドルシェーン村にある遊牧民の常宿で，エジプトの首都と上エジプトの諸都市を往復する際，キャラバンはそこに荷を下ろすのであった。

＊30　＊26で挙げた加藤博「国民軍の編成と遊牧民反乱」，ならびに＊5で挙げた Hiroshi Kato, "Nomads and Farmers in the Process of the Modernization of Egypt"。

＊31　この時の状況，インタビューの内容については，＊16で挙げた加藤博「近代エジプトの遊牧民」を参照のこと。

次の日の朝早く，彼はミニヤへの旅を続けるべく準備をしていた。この旅には彼の妻が同伴した。彼女は津々浦々に「ベドウィンのサキーナ」という名で知られ，草花の葉から抽出したもので傷を治すことに長けていた。

バクルはジャワーズィー族（qabīla）のベドウィンであった。ジャワーズィー族はミニヤ，ファイユーム地方を遊牧し，騎士道（furūsīya）（に富み），純粋種の馬を飼育し，ナイル沿いの都市住民にラクダ，その他家畜を供給することで有名であった。バクルの仕事は，ものを売りたい人とものを買いたい人とを仲介することで，商品をもって場所から場所へと多くの旅をしていた。

サキーナといえば，彼女もバクルと同じくベドウィンであり，西部砂漠に多く（住む）遊牧民集団（baṭn）の一つであるアウラード・アリー（族）出身であった。バクルはそれ以前に，彼のキレナイカ（地方）への旅行の一つで，彼女と結婚していた。彼は彼女のなかに人生の良き同伴者と，仕事の良き協力者をみたのであった。

夫婦はカイロから帰る途中であった。二人は新しい旅の間，ともにバクルの雌のラクダの背に乗り，新しい旅のこととか，彼らが行ううまい商売とかについて喋ることを常としていた。しかし，その日は違っていた。今回の場合，彼らの会話は，これまでにないテーマ，つまり彼らの同胞たち（qawm）の運命と彼らの家族（usra）の将来にとって危険なある事態，をめぐってであった。

バクルは沈んだ震え声で言った。「私は恐れを抱いているのだ，サキーナよ。……私は恐れているのだ。運命によってわれわれの同胞たちが引き込まれようとしている危機の結果を。危惧しているのは，カイロの統治者たちについてなのだ。彼らはいかに遊牧民の心に深く慣習（taqālīd）が根づいているかを，また彼らがどれほど父から子へと伝えられてきた昔からの慣行（ʿādāt）と良俗（shamāʾil）に結びつけられているかを考えようとはしていない。」

サキーナは彼の意見に合意し，付け加えて言った。「私たちは同胞たちに，彼らに対して企まれていることを知らせねばなりません。彼らに，カイロで私たちが聞いたこと見たことを伝えねばなりません。彼らは不意打ちを食らわぬよう注意し，明日に備えて守りを固めねばなりません。」

夫婦はカイロで何を聞き，見たのであろうか。（エジプトの）支配権は1854年以来，大ムハンマド・アリー・パシャの末子，ムハンマド・サイード・パシャに移っていた。新しい国の主人は，政治において，彼の前任者，彼の兄弟の息子，アッバース一世パシャと意見を異にしていた。彼は広い視野をもち，改革の熱意に燃え，労働者，農民に関心を払っていた。彼はエジプト軍に彼の時代以前の栄光を取り戻させ，エジプト軍を時代の要請に見合った基準と規律に基づいて編成することを心より願っていた。この偉大な改革者が関心を抱いた事項のうち，軍隊に関することこそが，この話の進行のためにわれわれが注意を向けねばならぬ事項である。

エジプトの軍隊は，それに先立って，年ごとに解体し，弱体化していた。ムハンマド・サイード・パシャは軍人の数を増やそうと，士官養成のための機関をつくった。彼は砦や要塞を建設し，また引き続き，クリミア戦争に人員，物資をエジプトから送り込んだ。彼は統治を開始してから数年にして，アメリカでのメキシコ戦争に参加した。彼が最も好ん

だ時間は，彼の士官，兵卒の間で過ごす時であった。

彼は，エジプトの一部の地方と国境沿いに遊牧しているアラブの諸部族（qabā'il）について，昔に彼の父，ムハンマド・アリーと彼の兄，イブラヒームが行ったと同じく，（国家に対して軍事）奉仕をさせようと考えた。ミニヤ，ファイユーム地方に定住したジャワーズィー族は，この目的を実現させるため，エジプト総督（wālī）が最初に目をつけた部族（qabīla）であった。

そこで，エジプト総督とジャワーズィー族の指導者（za'īm），オマル・マスリー（'umar al-maṣrī，あるいは，遊牧民の言葉で 'ammār al-maṣrī）との間に交渉が始まった。交渉は軍のチェルケス，トルコ人士官たちの主導下に進められた。こうして，政府と諸部族（qabā'il）のシャイフたちとの間に，次の2つの条項を除く，協力のためのすべての条項について合意がみられた。

合意をみなかった2つの条項とは，(1つは）徴兵は志願によってなされる（とする条項）であり，（もう1つは）徴発された部族民たちは（徴兵後も）引き続き彼らのアラブ服，とりわけ重く長い房のついたマグリブ帽（ṭarbūsh）を身につける（との条項）であった。

この2つの条項をめぐって対立が生じた。エジプト総督は徴兵方法に関する第1の条項については，これを認めた。しかし，彼は第2の条項については，これを受け入れることを拒否し，あくまでも徴発された遊牧民がエジプト軍人の（制）服を着るよう主張した。それは，彼が（軍）服の統一を望み，新しい軍隊の構成に不統一な要素の入ることを嫌ったからである。

しかし，他方，オマル・マスリーは彼の部族民（banū qawm-hu）が彼らの服とマグリブ帽を（徴兵後も）引き続き着用することを主張した。両者間の交渉は決裂した。

軍のチェルケス，トルコ人士官たちは，エジプト総督が遊牧民に関心をもち，彼らとの合意を求め，父や兄弟にならおうとする遊牧民の行動に好意をもつことを面白く思っていなかった。そこで，彼らは，エジプト総督が彼ら（遊牧民）の要求を力と暴力の前で飲み込まざるをえないように仕向けた。エジプト総督にオマル・マスリーと彼の集団（jamā'at-hu）に対して怒りを向けさせるためである。

彼らの努力は報われた。ムハンマド・サイード・パシャは彼らを罰し，無条件で彼の行政に服させるため，ミニヤとファイユームの遊牧民たちに対する遠征（軍）の派遣を決定した。

暴力と力の信奉者である士官たちは，遊牧民を他の遊牧民との戦闘に使おうと考えた。そこで，彼らは西部砂漠のアウラード・アリーの諸部族に使者を送った。使者たちは，ともに遠征に参加し，ジャワーズィー族を背後から襲うよう説得した。彼らの説得は成功し，一部の集団（'ashā'ir）が説得に応えた。カイロでは，軍団を組織し，それをできるだけ早く反乱地域に派遣するための準備が始まった。

以上が，バクルとその妻が首都滞在中に知るに及んだことである。彼らは，襲撃の準備がなされているにもかかわらず，彼らの部族がこの計画に気づいていないことに，そして（この）戦いを，地縁的にも血縁的にもジャワーズィー族に近い他のアラブ部族の援助のもとになそうと目論んでいる者がいることに，驚いた。

夫婦は，自分たちが耳にし，目にしたことを伝え，彼らに迫っている危険から身を守ら

ねばならぬことを警告するために，急ぎ同胞たちの故郷に戻った。

遊牧民は集合し，斥候隊がカイロとギーザの基地から彼らに向かう前に，戦いの鬨の声を上げた。武器を担げるジャワーズィー族のすべての男と女は，武器に殺到した。彼らは近隣の諸部族民（'ashā'ir）に助けをもとめた。近隣の諸部族は，可能な範囲で，騎兵，ラクダ乗り，糧食（の提供）でもって，彼らを助けた。戦いの英雄であり，経験豊かな彼らの指導者（za'īm），オマル・マスリー（'umar al-maṣrī）――彼はまた，'ammār として知られていた――が蜂起軍の指揮者の任についた。

遠征軍が，バハリア・オアシスへの道で，遊牧民軍を襲った。両軍の間で，断片的で散発的な小競り合いがあった後，最後に，「バラートの戦い」として知られた戦闘となった。アウラード・アリーの諸部族民を補助軍とする（エジプト）軍団はオマル・マスリーをこの地（バラート）に追い詰め，この戦闘で，蜂起軍を四方から包囲した。

こうして，遊牧民は四面楚歌の状況に置かれた。数時間続いた戦闘の後，オマル・マスリーは，今度こそ自分も完全に終わりであると観念した。彼は，もはや彼の仲間たちが兵士，武器，糧食（の数）で彼らに勝る（エジプト）軍の前に立ちはだかることはできず，この期に及んでの戦闘による決死の抵抗は無用である，と判断した。この勇敢な指導者も，運命は自分を見放し，彼と彼の同胞たちに制裁を加えようとしているのだと悟った。彼は彼の同胞たちに（戦闘からの）撤退と広大な砂漠への退却を指示せんとしていた。

まさにその時，突然，戦場の一方面で叫び声が上がった。混乱がそれに続いた。（エジプト）軍の前線が崩れた。砂埃の雲が舞い上がり，北方へ移動し始めた。「アウラード・アリーか，アウラード・アリーか」と叫ぶ声が聞かれた。戦局は逆転した。

しばしば戦争は，勇気と果敢さである以上に，策略である。ジャワーズィー族はこの戦闘で策略に訴えた。それが彼らを破滅から救い，戦いの混乱のなかで戦局を変えた。この策略はバクルと彼の妻サキーナの手によってなされた。

女は夫とともに，急ぎ彼女の同胞であるアウラード・アリーのもとに行った。そして，彼らに対し，次のように叫んだ。

「遊牧民が遊牧民と戦った時があったか。正面に敵の攻撃を受けている間に，ベドウィンが兄弟のベドウィンを背後から刺すような時があったか。諸部族民（'ashā'ir）の間の親類関係が血の裏切りと慣習（taqālīd）の破棄を引き起こした時があったか。さあ，戦闘を止めよ，アリーの子供よ。あなたたちが流す血はあなたたちの血だ。あなたたちがその幕を破るテント，あなたたちがそのロープを引き抜く住まいは，あなたたちのテントであり住まいだ。」

女は前線にまで彼女の行動を広げ，次のようにも叫んだ。

「われわれはあなたたちが纏っているこのバーヌース・マント，あなたたちが頭に被っているこのタルブーシュ帽のために戦っているのだ。」

アウラード・アリーの長老（シャイフ）たちの間で会議がもたれた。彼らは，遊牧民が同じ遊牧民と戦うことは自分たちに相応しくないとして，戦闘からの撤退を決定した。

彼らの撤退は（エジプト）軍の戦列に亀裂をもたらした。（エジプト）軍に対して，退

却命令が出された。かくて，オマル・マスリーとその仲間たちは，この戦闘において，戦場の主人公として留まった。

人の叫び声と武器のかち合う音のなか，ベドウィン女たちの喜びの声（zaghārīd）が響き渡った。

バクルの妻サキーナは先頭に立って喜びの声を上げていた。しかし，この日の彼女の喜びは完全な形では終わらなかった。運命はこの勇敢な女の喜びの声，感謝の声を台無しにすることを望んだ。

バクルが戦いの喧騒のなか，一人のチェルケス人騎士の刃に倒れたのであった。彼の妻は医者であったが，彼女の看病にも，また彼女の長けた医療の術にもかかわらず，彼女は彼の命を助けることができなかった。彼女がこの世で最も大切な人を死の爪から守るため，できるすべてをやり尽くしたその日，彼女の腕をもってしても彼女は報われず，（バクルは死亡した。）

勝利の歓声を上げた女たちは，今度は，死者を悼み，負傷者を看病し始めた。サキーナは彼女の夫のために泣き，その時以来，自分の同胞たちのところに戻ることを決心した。オマル・マスリーは同胞たちの面前で，この勇敢な女性の徳を讃えることを主張し，彼の回りに諸部族民（'ashā'ir）のシャイフたちを集めた。シャイフたちは，彼らの剣を掲げ，その行為のために彼らの勝利がもたらされたベドウィン女に挨拶をした。

以上が，長く重い房のついたマグリブ帽の話である。それは，ムハンマド・サイード・パシャの治世の初期におけるバラートの戦いからアウラード・アリー諸部族民が撤退した話であるが，この話には余談がある。

オマル・マスリーは部族の男女たちとともに，（エジプトにおける）部族の地を離れ，キレナイカ地方の奥深く，西部砂漠に住み着き，そこで，この地方に遊牧している諸部族と婚姻（関係）で結ばれることになった。

このベドウィンの指導者は彼の国から旅立ち，彼の故郷から移住したが，この事実において不思議なこと，それは，彼が戦いにおいて負けたからではなく，戦いに勝ったがために移住したということである。オマル・マスリーはネジュド地方出身であるが，彼がネジュド地方の先祖から受け継いだ慣習（taqālīd）によれば，勝利者は戦争で彼が勝利した地点から旅立たねばならない。この慣行（'āda）はいまだ生きており，アラビア半島西部，シナイ半島，西部砂漠，北アフリカ地方の多くの部族民（'ashā'ir）の間で機能している。これこそ，オマル・マスリーがバラートの戦い後に行ったことである。

この男（オマル・マスリー）は1863年まで，キレナイカ地方に住んでいた。この年，イスマイール・パシャが彼の叔父，ムハンマド・サイードの後を継いだ。新しいエジプト総督がまず最初に手をつけたのは，統治者とエジプト遊牧民の彼の臣民との間に合意と協調を回復することであった。そこで，彼は，ジャワーズィー族の指導者とその仲間たちを（エジプトに）呼び戻すために，使者をキレナイカ地方に送った。彼らはこの呼びかけに，感謝と恭順の意をもって応えた。イスマイールは，彼らがかつてもっていた特権をそのまま認めたうえで，彼らに西部国境の警備を託した。こうして，（引き続き認められた）特権の第一は，彼らのアラブ服とマグリブ帽の着用であった。

イスマイール時代に再び彼の同胞たちの指導者となったオマル・マスリーは，ことある

度に，次のように言っていた。

「われわれは盗賊ではなかった。われわれは悪漢ではなかった。われわれは抑圧者ではなかった。しかしながら，悪意の仲介者が統治者とわれわれとの間に不和の種をまいた。われわれは，いかなる環境，時，状況にあっても，エジプトに仕え，エジプトを高め，エジプトの玉座の柱を支える鋭い刃であり，正義の槍であった。」

オマル・マスリーの言うことに，誤りも誇張もない。エジプトの遊牧民はエジプトの町と村の子供たち（abnā'）とともに歩んだ。彼らは，戦争と征服においてエジプトとともにあった。彼らは，他の者たちと同じく，シリア地方，レバノン山岳地帯，ネジュド高原，ヒジャーズ砂漠，パレスチナ高原，スーダン平原で血を流し，命を落とした。スーダンのシャンディー村にある一つの墓には，オマル・マスリーの息子とその他何百の彼の仲間たち，つまりエジプトとナイル峡谷の統一のために戦場で倒れたジャワーズィー遊牧民の遺体が眠っている。

バラートの出来事は，一部の歴史家が描くような，その本来の意味での反乱ではなかった。その目的は，これら歴史家が主張するような，襲撃でも略奪でもなく，国の合法的な支配からの離脱でもなかった。そうではなく，それは，当時の支配者たちが好んだ策略と裏切りの政治（を示す）現象の一つであった。

イスマイールは知恵と経験をもって，（人人の）心からその（策略と裏切りの政治の悪）影響を取り去った。

Ⅳ．「おわりに」に代えて

三人の子供が死んでしまった。何ということだ。私は自分の故郷に留まっていたかったのに。子供の一人を徴兵に差し出し，武器を持たず，（残った）二人の子供とともに生活したかった。しかし，実際に私に起こったことといえば，その逆であった。

（『エジプト総督内閣官房トルコ語局文書』から）*32

1．「革命」物語はどのように作成されたのか

「革命」物語はいつ，どのような情報に基づいて書かれたのであろうか。筆者のハビーブ・ジャマーティーが死んで久しい今，物語作成の経緯を知ることは不可能である。実際，新聞，雑誌での死亡記事から，娘の一人がカイロの高級住宅街に住んでいることを知り，彼女をアパートに訪ねたのであるが，ジャーナリストの彼女は，快く対応してくれたものの，関連する情報は一切，持ち合わせていなかった。

しかし，人の出会いの妙といおうか，誠に幸運なことに，われわれは，「革命」物語の歴史資料としての価値を計るうえで貴重な，物語作成の経緯についての情報をもっている。それは，彼の言葉を信じるならば，ほかならぬオマル・マスリーの曾孫，マスリー・キーラーニーこそ，ハビーブ・ジャマーティーに「革命」物語を書かせるきっかけをつくった当の人物だということである。

彼が「革命」物語に言及した私の論文に鋭敏な反応をした，と先に述べたが，それは，故無しとしなかったのである。彼は，オマ

*32 *maḥāfiẓ ma 'īya sanīya turkī, maḥfaẓa raqm 7, wathīqa raqm 253.*

ル・マスリー「革命」のモチーフを与えたのは自分であり，ハビーブ・ジャマーティーはそれをもとに，文学性豊かな「革命」物語を書き上げたのだと思っている。その間の事情を説明するマスリー・キーラーニーの言葉（1993年12月19日での会見）を，次にそのまま採録してみよう。

私の叔父の息子にアブドゥルハミード・アギーラという人物がいる。彼はカイロのホテルに滞在していた。ホテルの名前はルーナーバールクといい，グムフーリーヤ通りのカンタラ・ディッカ広場にいまもあるが，彼はそこに20年住んでいた。アブドゥルハミードは独身であった。彼は多くのエジプト人，リビア人との間に広範な人間関係をもっていた。ある彼への訪問時に，私はそこで作家のハビーブ・ジャマーティーに会った。彼はアブドゥルハミードの個人的な友人だった。アブドゥルハミードといえば，彼はオマル・マスリーの娘ザヌーバの息子である。その時，ハビーブ・ジャマーティーは「歴史に忘れられた歴史」というタイトルのもとで連載物を書いていたが，この『ムサッワル』誌上での連載物は，それまでに，すでに数年続いていた。私はそこでハビーブ・ジャマーティーにオマル・マスリーの物語を掲載してもらおうと，人々に伝えられている物語に基づいて，その短い要旨を示した。すると，ハビーブ・ジャマーティーは私に，この要旨で十分だ，自分はオマル・マスリーの物語について多くを知っており，アブディーン宮殿の文書館で彼に関する情報を含む文書にあたるつもりだ，と言った。実際，彼は私の物語の要旨と文書を使って，『ムサッワル』誌にオマル・マスリーの物語を載せた。彼との会合は，1950年にオマル・マスリーの物語が掲載されるおよそ4か月前でなかったかと思う。その時，私は19歳，ハビーブ・ジャマーティーは40歳代であった。

2.「事実としての革命」と「物語としての革命」

おそらく，「革命」物語は，今後も語り継がれていくだろう。それも，オマル・マスリー伝承の核心として。それは，口承文化が文字文化に圧倒されつつある現在，この「革命」物語にかぎらず，今後の伝承は，遊牧民社会といえども，活字化された情報抜きには語れなくなるであろうからである。そこには，遊牧民社会における文化伝統と文化継承に係わる大きな問題が示唆されている。

実際のところ，オマル・マスリーの存在を語り継ごうとしている人間は，間違いなく「革命」物語を意識している。私はオマル・マスリーの存在を知る多くの人に聞き取り調査をしたが，聞き取り後，情報の出所を尋ねると，彼らのほとんどが，父，祖父，長老から聞いたと答える。

しかし，さらに突っ込んで，「革命」物語を知っているかと問うと，その多くは，「自分自身は実際に読んだことはないが，そのような物語があるとは聞いている」と答える。かくて，彼らが意識的にせよ無意識的にせよ，「革命」物語に影響されていることが暴露される。もっとも，答える時の戸惑いの仕種から，「なぜそのようなことを問うのか」と彼らは思っているに違いない。

とりわけ，伝承を残そうとしている人間にとって，活字に対する敬意は相当なものである。ひとたび活字化された情報は，その形成過程など省みられないまま，一人歩きする。

このような文化環境のなかでは，「伝承」と「物語」が区別されることはない。実際，「革命」物語は，オマル・マスリーが帰属するジャワーズィー部族に言及した多くの伝承文学において，繰り返し採録されている。私が「革命」物語に出会ったのも，先に指摘したように（121頁），こうした伝承文学の一つにおいてであった。

しかし，ハビーブ・ジャマーティーの「革命」物語は，結局のところ，どう転んでみたところで，一人の文学者の手になる創作である。したがって，作品としての価値とは別に，歴史研究の資料として使うためには，そのどこが作者の創作であり，そのどこが史実なのか。そして，史実と認められる箇所があるならば，それは何に依拠しているのかが問われなければならない。その上で初めて，「事実としての革命」を論じることができる。

それは，法令，通達などの「公的」文書から，言い伝え，噂などの「私的」情報まで，すべての資料を動員しなければならず，誠に困難な作業である。しかし，本稿で紹介した資料の内容からだけでも，オマル・マスリーの「革命」が，エジプト総督みずからが指揮をとった政府軍の派遣に示されるように，その規模といい，その政府と遊牧社会に与えた広範な影響といい，大きな事件であったことは間違いない。「事実としての革命」は起きたのである。